

異なる精神世界が、お互いの世界を発見しようとするとき、誤解や空想が積み重ねられ、時に理想的な夢の形をとったり、悪夢となって現れる場合もあるとフランスの哲学者ロジェ＝ポール・ドロワは警鐘を鳴らした。確かに「異文化間の対話」は、学問的研究が進んだとしても自分たちが手にした色眼鏡を通して見ているという自覚がなければ真の対話は成り立たないというのは事実であり、インド・イスラームと仏教の場合にもあてはまる。

近年の碑文研究や考古学的遺物の発見により、中世のかなり遅い時代まで南インドでの仏教徒の活動があったことが明らかになってきた。だが、インド・イスラームは、政権樹立時に既にその勢いを失っていた仏教について、スィンド史に語られるサマニーと呼ばれる人々の情報や、モンゴル帝国時代の遺産としての仏伝文学や仏教教理の断片的記述に負うばかりで、その真の姿を知らないままに、ようやく近代になって外の世界に出ることによって、宗教実践としての仏教を目のあたりにすることになった。

本発表の扱う主題を提供してくれるのは、近代の幕開けとともにインド・イスラームの間に生じた改革運動の担い手となった一人のムスリム知識人である。その人物は、19世紀後半から起こった文化教育・政治社会運動、アリーガル運動の端緒を開いたサイイド・アフマド・ハーンの子孫にあたるサイイド・ロス・マスウード(1889-1937)であり。彼は、祖父が目指した時代の精神に即した社会倫理を求めた宗教の近代化を、西欧の科学教育だけでなく女子の教育をも含めた人格形成のための教育改革で実践した。

ロス・マスウードは、ハイデラバード藩王国のニザームの命で教育改革の手本とするべき姿を求めて来日し、詳細なデータを伴った報告書や日記を残し、数多くの講演で、日本で得た近代的な教育のヴィジョンを示し実践した。多くの在日インド人や高楠順次郎をはじめとする日本の知識人、政界人らとの交流を通して、「仏教誕生の国からやってきた仏教を知らないインド人」として日本人の宗教観とその背景にある文化を観察し、その特徴が何に起因するのか、それを育てた教育システムに目を向け、自国でどのように応用できるのかを模索し実践したのである。

ロス・マスウードの来日前後の時代は、さまざまな政治的な思惑の交錯するなかで、日本仏教の側からも中東世界やイスラームへの関心がもたれ、それぞれの教団内部でも世界に通じる新しい仏教の姿を模索する運動が起こっていた時代であった。本発表では、様々な面での近代化を模索した人々の交流の歴史の中にロス・マスウードの言説を置いて、彼と同じ時代に日本を舞台に活躍したインド人ムスリムとイスラームに関心をもった日本人の言説のなかの仏教を含む宗教のとらえ方を分析し、彼らが近代の装いをこらすのではなく真に内発的な近代化をどこに見出していったのかを探る。

〈キーワード〉 インド・イスラーム サイイド・ロス・マスウード 近代化